

震災復興企画「アートでつながる壁画プロジェクト」
（宮古―室蘭航路就航記念）in 青山学院女子短期大学

ともしび
共生委員会ニュース

2018年度　1号

2018年5月21日版

共生委員会ニュース「ともしび」　　スクールモットー「地の塩、世の光」

共生・校外学習委員会は平和や共生に関わる活動、修学旅行などを担当する教員の委員会です。原爆投下の地、長崎を訪れる2年生の修学旅行だけでなく、高等部の3年間の生活を通じ、同じ社会に共に暮らす様々な人々との関わりに目を向け、平和や共生の問題を考えていきましょう。この共生委員会ニュースでは、様々な経験をする機会を得た生徒や教員の声も他の多くの皆さんへ届けたいと思っています。その経験を共有し、一緒に考えるきっかけとして下さい。

高等部の平和共生教育

修学旅行、各教科の授業など3年間を通して平和と共生について学んでいきます。平和共生 LogBook に一人ひとり違った足跡を残しながら、考えていきましょう。

3年間の流れを紹介

1年生

聖書　杉原千畝の生き方を通して

国語総合　遠藤周作とアウシュビッツ・沈黙

英語　Playing the Enemy（人種差別政策アパルトヘイト撤廃後の南ア ラグビーワールドカップ）

生物　放射線被曝の影響

2年生

聖書　内村鑑三の生き方を通して

現代文 B　戦争に関するテーマ(内容未定)

日本史 A(現代史)　太平洋戦争、アウシュビッツ収容所、原爆の歴史

現代社会　日本国憲法第9条

英語　Life in a Jar

物理　原子力と核兵器

修学旅行　平和講話、長崎原爆資料館、キリシタン弾圧の歴史

3年生

聖書　M・L・King Jr 牧師の生き方を通して

現代文　共生に関するテーマ（内容未定）

英語　共生に関するテーマ（内容未定）

平和共生に関する個人論文作成

その他

グローバルウィーク、学問入門講座「共生と平和」、岩手県宮古市の高校との交流、フィリピン訪問プログラムなど

平和・共生に関する活動に興味がある人は、藤本、武藤、吉成、キャロル、ベリーまで声をかけてください。

フィリピン訪問プログラム　先輩インタビュー

2017 年のフィリピン訪問プログラムに参加したU.H. さんは、現在、青山学院大学国際政治経済学部の 2 年生です。フィリピン訪問プログラム参加後、特定非営利活動法人チャイルドファンド・ジャパンでインターンを行っています。高等部の学びを続ける人を知るため、今回藤本先生がインタビューを行いました。

―こんにちは。Uさんは、インターンではどのような事をしてるの？

こんにちは。私の仕事は、主に手紙の翻訳ですね。フィリピンで支援をうけているチャイルドから日本の支援者さんへの手紙は英語で届くのですが、支援者の方には英語の手紙が読めない方も多いので、日本語の翻訳をつけます。

―そもそも、なんでインターンをやろうと？

チャイルドファンド・ジャパンでインターンを始めたのは国際経済学部で、開発経済を学ぶ上で、支援の現場の視点って大事だなと思ったことと、あとは、フィリピン訪問プログラムがすごく思い出に残っていて、その時の感覚を忘れたくなくてっていうのもあります。笑

―やってみて、感想は？

チャイルドの手紙から日常が垣間見れるようで、楽しかったですよ。

―インターンを通じて考えたことは？

うーん。インターンをやってみて、やっぱり支援者とフィリピンのチャイルドがどう繋がるかが大事な気がします。私たちは訪問して実際に会ったことで、チャイルドの素顔と出会い、応援したいという実感を持てました。手紙も素晴らしいけど、もっとチャイルドの温度感が伝わるような関わりができたらいいのに、と。

―ちなみに大学ではどのようなテーマを研究しているの？

今は映画やマスメディア、ジャーナリズムの役割について考えています。たとえば、支援を訴えるときには「かわいそうな顔」を強調すれば、同情は増えるかもしれないけど、それってフィリピンの子どもたちの実際の顔とはだいぶ違うんですよね。シンプルにすると伝わりやすいけど、伝わる事が記号化されてしまって、本当は大事なディテールが切り取られてしまう。情報として「知ってる」、というのと肌感覚で「伝わる」の間には大きな差があると思っていて、その差を埋めるような表現方法がないか、ということを考えています。

―高等部生に一言。

切り取られてシンプルになった情報ではなくて、加工されていない生の出会いを経験してほしいと思います。あと、フィリピンプログラムに興味を持ってほしい、かな。笑



U.H.さん

フィリピン訪問プログラム 2018

私の使命

HR301　O.K.

フィリピンから帰ってきて私は変わったと思う。実際に様々なことを知ってから私は自分の「使命」について考えるようになった。今まで使命についてあまり深く考えたり、感じたりすることはなかった。しかし今の私には使命があると気付いた。私の第一の使命は伝えることである。実際に現地に行って見て、知ったのだから当然伝える義務があると思う。例えば、スラム街に住む人々にとっては汚い水でさえ貴重な資源で、お金を出さないと買えないという事実。私達からするとありえないことであると思うだろうが、現地の人はそうしないと生きていけないのだ。他には、いくら頭が良くて大学に行きたいという志が強くても、経済的に不可能という事例がほとんどということ。このように知ったのにそのまま伝えずにしておくのは無責任だと思った。そこでこれらのことを伝えるために、二年生であった私は平和共生論文を使おうと決めた。本来は夏休みに決めて用意していた「憲法九条改正について」をテーマにして書くつもりでいたが、帰国後に本当に私が伝えたいことは「九条改正」ではなく「フィリピンの貧困」であると考えたからだ。また、高校生の今しか書けない論文であるとも思ったためテーマを変えた。そしてこの一年間をかけて更にこの論文を良くしていきたいと考えている。他には直接伝える手段も取っている。しかし、真剣に耳を傾けてくれる人が少なくかなり難航している。これからの目標はより多くの人に真の姿を伝えていくことだ。

そして次の使命は、常に知り続けるということである。この「知る」ということは支援においても重要である。重要である理由とは、何も知らずには適切な支援ができないはずだからである。例えば、相手が何を欲しているかも分からずに適切な物資を送ることはできない。また、それに加え現地の政治体制、法制度、情勢、経済状態を知っておくとよりよい支援につながるとも思う。ここで気を付けるのは、相手のことだけでなく自分のこともよく知っておく必要がある。「貧困」を生み出している原因に自分も関わっていて遠い国の問題として考えることのないようにするべきだからだ。そしてこの「知る」ということの最大のポイントは自分がまだ学生であるということだ。つまり、時間をかけて「知る」ことが出来るは学生の特権であるということだ。社会人になってからは十分に時間が取れないと思う。だから学ぶことが本業である学生の内に様々なことを知っておく必要があると思う。



旧ダスマリニャス　スラム街の一角



そして最後の使命はかなり先の私の将来についてのことだ。今までの私の将来希望する職は国内の弁護士であったが、フィリピンから帰ってきて変わった。私は、国際的な弁護士として世界中の法で貧困問題にアプローチする者になると決意した。いつかはフィリピンへ戻り現地で子どもたちの明るい笑顔の為に働きたいと決めた。またフィリピン内にとどまらず様々な国の子どもたちのもとへ飛び回りたい。

このように、私はこのプログラムを通して自分の価値観を大きく変えられた。それだけでなく自分の人生をも変えてしまう大きなインパクトがあった。本やテレビからは絶対に分からない「貧困」の現状を知ることができるプログラムだった。

2018年度　岩手県宮古訪問プログラム　参加者募集

東日本大震災で大きな被害を受けた岩手県宮古市を訪問し、震災遺構で被災の話を聞き、

宮古北高校や地元で活動するボランティア団体「みやっこベース」と交流します。

日程：　２０１８年８月２日（木）～８月５日（日）　３泊４日

訪問地：　岩手県宮古市

内容：　宮古市田老地区防災研修、宮古北高校や「みやっこベース」との交流、ALL青山での支援イベントなど

一次募集締切：５月２１日（月）※本日！

※定員に空きが出た場合に限り、６月１４日締め切りの二次募集を行います。

募集人数：　15名程度

申し込み・問い合わせ：　武藤（理科　物理・地学）、吉成（国語）まで



震災遺構・田老観光ホテル



漁協でのワカメ茎取り体験